中国地区英語教育学会研究紀要No 9 (1979)

英語教育と文化理解—基礎的研究

呉工専　山　岡　俊比古

1. はじめに

一般に，学校で行なわれる外国語教育の目的の1つにその外国語を母国語として話している人々の文化を理解することがあげられる。日本の英語教育においても，このことは指導要領に明記されている。もちろんここで言う文化とは文化人類学で定義されるもので，その人々の生活の仕方，考え方を示すものである。そもそも言語の学習において，その言語を包んでいる文化の型や価値の幾分かでも理解することなしには真の学習はあり得ないとも言われている（2：149）。

このような外国語教育の重要な面は広く認識されているといえるが，現実的に実際の教授の中でこれが実現されているとは言い難い。このような傾向はすべての国の外国語教育に見られるものである（6：135）。

この小論では，この傾向を生んでいる原因を探り，今一度外国語教育における文化理解の重要性を検討する。

2. 文化理解の現状

文化理解を十分に実現し得ていない理由に次の3つが考えられる。

① 外国語教育の誤った把握

教師の中に自分の教室での仕事は他の民族の態度や生活の仕方についての理解を持たせることではなく，学生にその言語の基本的構造を教え，話すことと書くことにおける理解と言語使用の技能を発達させることが唯一の目的であると考えている（4：262）。

② 単純すぎる前提

言語教師によってよくなされる1つの単純な前提に，ある外国文化の言語的パターンを習熟すればそれ自体が「母国人のように考えること」につながって行くとするものがある（7：45）。

③ 具体的方法の欠除

現場の教師が次のように言うのも無理からぬところである。「より良き国際理解は1つの崇高な目的であり，私はそれを実現する責任がある。しかし，例えば火曜日の9時半からの授業においてこのことを実現するために一体何を行なったらよいのであろうか（1：205）。

以上はいずれもアメリカの学者によるアメリカにおける外国語教育，第2言語教育に対しての指摘であるが，同じことが日本の英語教育についても言える。つまり，英語教育における文化理解の重要性は指導要領にも明記されており，また，英語教育の目的論を展開する時には必ずといってよいほど指摘されることでありながら，このことの実現を明確に意図した努力はなされていない。日本の英語教育が，初めて英語を学び始める学習者の意欲はさておいても，大学入試によって支えられている感のあるとき，その中での授業が文化理解をその重要目標に据えているとは思われない。また，入試で査定される英語教育の成果が文化理解を含めたものでない点をも考慮

に入れると，日本の英語教育において文化理解が志向されていないことの直接的原因の１つには，大学入試において課される問題の性格があげられる。そしてこのような現象の背景には上記した３つの意識が存在していると考えるのが妥当であろう。

3. 英語教育の教育的意義

英語を教えることの真に教育的な意義は何であろうか。このことは日本の英語教育の歴史の中で繰り返し論議されてきたことであり，最近もまた，実用的効果を伴わないということから英語教育を義務教育の対象から外すべきであるという意見として現われている。

英語教育を実用面と教養面に分けることがしばしばなされるが，英語が何の文化背景も持たないエスペラントのような人工語でない限りこの２分法は有効でない。つまり，もし可能であるとして実用ということのみを目標にした英語教育であるならば，これは本質的にエスペラントを教えることと何ら差異はないことになる。英語教育が教育であり得るのは，その過程の中に英語文化の理解を必然的に含ませ得る可能性が横たわっているからであると考える。

Rivers はアメリカの大学における外国語履習者の減少と中途脱落者の増大に直面し，その原因を外国語教育がその持ち得る可能性を実現し得ていない点にあるとして次のように述べている。

> Mere fluency in the production of foreign-language utterances without any awareness of their implications or of their appropriate use, the reading of texts without a realization of the underlying values and assumptions – these so-called skills are of factitious usefulness even on a purely practical level, and may well call into question the claim of foreign-language study to a place in a program of liberal education. (4: 263)

さらに Rivers は外国語教育の教育的意義を次のように規定している。

> The unique contribution of Foreign-language study that is truly educational, in the sense that it expands the student's personal experience of his environment, and truly humanistic in that it adds a new dimension to his thinking, is the opportunity it provides for breaking through monolingual and monocultural bonds. (5: 134)

社会事情を異にする日本ではアメリカと同じ現象は見られないが，もし大学入試というかせをはずしたならどうなるであろうか。根底には恐らくアメリカに見られる現象を生むものと同じ意識が学習者の中に流れているものと思われる。現実に，大学入試を意識しなくてもよい学習者における学習意欲の衰退は大きい。英語教育は英語の学習を中学校；あるいは高等学校で断念する学習者にとっても意味のあるものでなくてはならない。

このような観点からも，英語教育における文化理解の果す役割は，英語教育の中でその中核をなすものであると考えなければならないであろう。

さて，文化理解とはその言語を通じてその言語をとり囲んでいる文化を理解することであり，その文化の正しい理解の達成がその目的となるべきものである。しかし，現実的にその文化の微細なことがらも含めた全貌を完全に理解することは，その文化圏の中でかなり長期間にわたって生活し，体験すること以外では不可能であろう。従って，ここに外国語教育において文化教材を選択し，適切に配列する必要性が出てくる。

文化理解の達成を計ること自体が価値のあることであるが，その努力を体験することも同様な価値があると言わなければならない。一般的には，母国文化に慣れ親しんでいる中では外国文化に見られる事象に対し，これを単に奇異なものとするか，あるいは間違ったもの，劣ったものとして決めつけてしまう傾向が強い。あるいはこの逆の外国文化崇拝的傾向にも陥りやすい。これは母国文化の中の価値体系で外国文化を見ていることに他ならない。正しい文化理解のためには母国文化の価値体系ではなく，その外国文化個有の価値体系の中で位置づける努力をしなければ

ならない。従ってここでは，慣れていない新しい事象に対し，安易な即断を避け，忍耐強くかつ寛容的な態度でのぞまなければならない。そしてここから外国文化を理解するために必要な基本的態度が育成される。従って，文化理解においては文化を理解すること自体と，そのために必要な態度が育成されることの相方において大きな意義が見い出せる。

Nostrand（3：5〜9）によれば，文化教育の2つの目的は cross-cultural communication と cross-cultural understanding であり，前者は後者に基づくという関係が成立している。そして後者を達成するためには忍耐強く，寛大で理性的な心理的能力が必要であるとし，特に次の3つの態度の育成が重要だとしている。

① cultural relativism —すべての文化はそれぞれ個有の価値体系を持ちそれ自体において矛盾のない体系であるということの自覚

② perspectivism —母国人は持っていない外から見通す視点を外国語学習者は持ち合わせているという優位性の認識

③ imperturbability —外国文化を偏見なく客観的に理解できる能力

以上の指摘は，外国文化の理解はそのために必要な態度を育成することもその重大な教育的目標であることを考えると，大変に意義深いものである。

以上，文化理解の教育的意義という観点から論じてきたが，ここで鈴木孝夫氏（8：181－188）の指摘に拠りながら，文化の違いの理解が我々の英語教育に深い洞察を与えてくれる一例をあげる。一般的に日本人は英語を話すことが苦手で下手であるといわれる。この原因は色々考えられるが，次にあげる文化的理由も重大である。つまり欧米人は自己の確認が確定しており，誰に対しても一定不変の自己を保持するのに対し，日本人は一定不変の自己を持たず相手との相対関係の中でそのつど自己規定が行われる。従って対話において欧米人は絶対的自己表現を行なうのに対し，日本人は相対的自己表現の形をとる。この結果，英語を話す外国人に対する時日本人は，その外国人の自分にとっての位置づけを決定することが難しく，従って，自分自身の位置づけもできないがゆえに自己表現ができないことになる。

このような文化の違いに対する自覚，とりわけこの例においては，外国文化の理解を通しての自分の文化の再発見，自覚への到達は教える側にとっても，学習する側にとっても極めて意義深いものといわなければならない。

4. まとめ

英語教育が学校教育の中に位置づけられている理由を決定する重要な要素の1つとして，英語を話す人々の文化理解を促すことが可能であることがあげられる。同時に，異文化を理解するために肝要な態度を養うことができること，およびそれを通しての自国文化へのより深い自覚を生むことができる点も見逃がせない。

このような英語教育の文化的側面は，英語教育の教育的意義を決定する一要素というよりむしろその中核を形成するものであると言った方が良いかも知れない。つまり英語教育の文化的側面を強調することはまず学習者の動機づけに大きな役割を果す。言語的側面のみに傾斜した学習内容では，その多分に機械的性格のゆえに学習者の意欲を維持することは難しい。このことは同時に教える側についても言える。教育者としての十分な自覚と自信を持って行なえる英語教育とは，この文化理解とその中に確実に位置づけたものであろう。

英語教育における文化理解の役割をただ単に漠然と感じるのではなく，これまで述べてきたようにその役割を明確に把握し，その実現を義務的なものとして捕えなければならない。このこと

は日本の英語教育にかかわるすべての人々が自覚しなければならない。これを促進するために最も急がれるものは，教員養成機関の中でこの方面の研究体制を整え，カリキュラムの中への位置づけを果すことであろう。

REFERENCES

1. Brooks, N. (1968) "Teaching Culture in the Foreign Language Classroom," *FLA* 1, 3, 204-217.
2. Lado, R. (1964) *Language Teaching: A Scientific Approach*. McGraw-Hill, Inc.
3. Nostrand, H. L. (1966) "Describing and Teaching the Sociocultural Context of a Foreign Language and Literature," in A. Valdman (ed.) *Trends in Language Teaching*. McGraw-Hill Book Company, 1-25.
4. Rivers, W. M. (1968) *Teaching Foreign-Language Skills*. The University of Chicago Press.
5. ———. (1970) "Teacher-Student Relations: Coercion or Cooperation?" in W. M. Rivers (1972) *Speaking in Many Tongues: Essays in Foreign-Language Teaching*. Newbury House Publishers, Inc., 132-144.
6. Robinson, G. L. (1978) "The Magic-Carpet-Ride-to-Another-Culture Syndrome: An International Perspective," *FLA* 11, 2, 135-146.
7. Seelye, H. N. (1968) "Analysis and Teaching of the Cross-Cultural Context," in E. Birkmaier (ed.) *Britannica Review of Foreign Language Education*, Vol. 1, Encyclopaedia Britannica, Inc., 37-81.
8. 鈴木孝夫 (1975) 『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮社.